

猪年に豚を語る

揚 珍

1995年は1月21日から乙(キノト)亥(イ)年に入る。十二支で亥は、中国も日本も同じ「猪」と書いているが、中味はすこし違っている。日本では猪は「いのしし」の意味で野生の豚を指している。中国では「猪」は豚の意味である。つまり、日本では野生豚の年を過ごし、中国では豚の年を過ごすわけだ。

「豕」が居なくては「家」とならない

昔、中国では豚を豕と呼び、亥も豕も同じような形の文字を書いていた。どちらも豚の象形文字らしい。豚は金になるため、別名「烏金(黒い金)」と呼んだり、黒々とした姿をとらえ、「黒面郎」「烏鬼」「烏羊」「烏將軍」などと呼んでいる所もある。また、口先が長いので「長喙參軍」と呼んだり、清代末期の貴族の祭官は、生きている豚を「黒爺(黒いだんな)」と呼んだりして、まるで豚を人間あつかいしていた。

豚は人類が最も早く飼い馴らした野生動物の一つで、馬、牛、羊、鶏、犬とともに「六畜」と呼ばれている。しかも、豚は六畜の先頭に立って、昔から人類の生活と密接な関係を持ってきた上に、原始時代から近代にかけて、豚が財産だった。「家」という字は屋根の下に「豕」があっはじめて「家」と言えるわけで、はやくも母系家族の時期から、人間は猪を豚に飼育しはじめていた。浙江省余姚県の河姆渡新石器文化遺跡からは、いきいきとした陶製の豚が出土している。この豚

は、腹が地面に垂れ、頭が大きく、口を突き出しているいまにも駆け出しそうな可愛い格好で、だいぶ今日の豚に近づいてきた。このことから、中国での猪の家畜化は少なくとも七千年前には始まっていたと言えるだろう。

1991年、アメリカの考古学者ロゼンバーグが率いる考古隊が、トルコの東南部高地のハラン・セミ村で、一万年前のものと思われる豚の骨を大量に発見したが、その臼歯は明らかに小さくなっており、すでに猪から豚への転化が完成していた。ハラン・セミ文化の発掘成果は考古学界をゆさぶった。農業の起源に関する伝統的な理論が重大な挑戦を受けたのである。

竜に神あり、豚に霊あり

竜と豚を並べて論ずるのはばかばかしく見えるだろう。というのも、竜は神とみなされ、雷と稲妻を小わきにかかえて天空を巡行し、大波を立てて海を荒らす雄々しい姿だが、一方の豚は俗物

豕 豕 豕 ← 豕

亥 豕 豕

家 家 家 家

甲骨文字からの変遷：上から順に豚、猪、家

で、ただただ長い口先で地面に餌をさがしたり地べたで眠りこけるだけで、体つきは品がなく、動作緩慢で、竜と比べれば天と地の相違がある。

しかし、昔の人たちの豚への評価はけっこう高いものがある。遼河流域（内蒙古自治区の東南部を含む遼寧省を指す）で発見された五千年前の紅山文化時期の出土品に、竜と一緒に豚らしい獣の玉が含まれているが、これで豚が古代人にどう扱われていたかが推測できる。

更に人びとの注目を引くのは内蒙古の“翁牛特旗”（オンニユド：旗は県に相当）から出土された濃緑色の玉竜で、高さ26センチ、体が「C」の形に曲り、口は豚に似て、鼻先は平で二つの鼻孔があり、豚の頭そっくりだ。その頸筋にはたてがみが高く立っているが、優に21cmを超えており、明らかに豚のたてがみを芸術化したものである。古書『礼記・曲礼』には「豕曰剛鬣（タテガミ）」と記してある。こうしたことから、古代人が長いたてがみを豚の主な特徴と見なしていたことが分かる。「西遊記」の猪八戒が仏門に入る前は「猪剛鬣」と呼ばれていたのもそれなりの理由があるのだ。竜の頭の形は、はじめ豚を真似た可能性があるとして、考古学者の孫守道氏らは見ている。

1985年、内蒙古敖漢旗（アオカン）の小山遺跡から出土した陶瑞獸尊もその証拠になりそうだ。この獸尊の腹には三つの動物が描かれているが、その中に豚の頭と竜の体を持つ動物がいる。あきらかに猪だ。その鋭い牙が威風堂々としている。

なぜ竜が崇拝されるようになったのかはまだはっきりしていない。多くの人が竜は大きな動物を象ったものだと考えているようだが、*竜を崇めるのは、昔から農作物のできに関係の深いお天道様への崇拝とつながっている。

原始のお祭りの中で、豚は最もよく使われたお供物だ。豚はよく泳げるので、古代の人は豚を「水畜」と見なし、御存じ猪八戒が天上で「天蓬元帥」として率いたのも水軍だった。お天道様を拜んで雨を求め、洪水を防ぐお祭り行事の中で、おそらく「水畜」は人類が神と連絡をとるのにもっとも理想的な使いとなったのだろう。祭りを重ねるにしたがって、豚もだんだん神格化され、はなはだしいのは豚が雷電の神だという伝説まで現れたが、これなど更に竜神に近くなったわけだ。

歴史によると、東北地区で生活している女真人つまり現在の満州族の祖先は、上古時代に豚と密接な関係がある。彼らの家畜には牛も羊もなく、いわんや馬に乗ることなども知らず、食べるのは豚肉、着るのは豚の皮、女性の飾り物は猪の牙の細工、祈禱師は豚肉を供物にし、寒い冬には豚の脂を身体に塗って寒さを防いだという。

かつて遼河流域で暮らしていた契丹人の民族起源の神話の中に次のくだりがある。

「昔むかし、契丹のある首領が猪の頭（カブト）をかぶり、猪の皮を羽織り、テントの中に住い、めったに外へ出ない。ある日、妻が彼の羽織を隠してしまったら、彼はそれっきり姿が見えなくなった……」この人こそ契丹の始祖だ。大抵の契丹人はかつて自分も猪の後裔だと思って猪のトーマを飾ったことがある。注目すべきは、契丹人の発祥地がちょうど古い紅山文化が営まれた地理圏内にあることだ。

竜の起源は豚だという説はなかなか受け入れ難いようで、それは豚がのろまで汚いためだろう。しかし動物学者は、それは偏見だと言っている。

豚ののろまではなく、時には犬の代わりに麻薬捜査をしたり追跡することもできる。また、豚が

よく泥の中をころげ回るのも水が好きだからで、暑さを払い汗をとるためである。これも人間がペット犬のように豚を洗ってやらないからだ。西洋では、豚をペットにする運動がかなり盛んになっており、豚の名誉回復に役立つだろう。きれいに洗った小豚を犬のようにつれてぶらぶらと歩く光景もみられるが、一風変わった趣のあるものだ。山中に住む猪と言え、とてものろまどころではないし、威厳もあって、百獣が恐れる虎でさえも避けて通る。「動物世界」というテレビ番組では、猪が自分の子を守るためにチーターを攻撃して、ついに追っ払っている。猟師たちは林に住む猛獣の気力に「一番目は猪、二番目は熊、三番目は虎」という順番をつけているようだが、猪にとってこの上もない栄誉だ。孔子の弟子・子路が鶏冠（トサカ）の形の冠を被り、猪の牙を腰に差したのは、どらも勇ましくて戦（イクサ）好きだからである。孔子が子路を弟子にしてからは、面と向かって悪口を言う者がいなくなったがこれも猪のお陰だろう。



人気者の猪八戒

猪は体が大きくて猛々しいから、原始時代に竜と混同されたのも、決して不思議ではない。

西欧では「神は人類が自分たちの顔を見ながら造った」ともいわれている。だからゼウスは白色人種そっくりであり、道教の神は黄色人種の顔になっている。それなら竜はどうだろう。竜は人間が最もよく知っていた動物、即ち豚を象ったものだと考えられないだろうか。かりに違ったとしても、決して猪八戒の同類を見下してはいけないのだ。

帝王の尊貴は豚に及ぶ

帝王の尊貴は言葉にならないほど高いものだが、さりとて生まれ年を自分で選べるものではなく、一部の帝王は豚と切っても切れない因縁がある。その昔、漢の景帝は一匹の赤い豚が雲から崇芳閣に降りる夢を見た。目を覚ますと赤い気体が霞のように窓と門を覆っていたので、以来崇閣を猗蘭殿と改名した。後に王夫人がここで皇子を生んだが、これが有名な漢の武帝劉徹（紀元前156～前87）である。迷信っぽい言い方をすると人は、漢の武帝は天上の赤豚の生まれ変わりだという。「祿山事跡」には次のようなことが書いてある。

唐の時代、安祿山がある日の夜会で酔いつぶれて眠ってしまうと一匹の大きな竜頭の豚に変わった。驚いた側近が玄宗にご注進に及んだが「豚竜にすぎず、なにもできはしない」と取り合わなかった。後に安祿山の乱は唐王朝の土台を揺さぶり、玄宗は長安（現在の西安）に逃れ、寵愛する楊貴妃の命も守れなかった。この竜頭の豚は何と恐いものだったことか。

元王朝が朱元璋（1328～1398年）の率いる農民蜂起軍に攻撃されて崩壊寸前になった。元の順帝

(1320~1370年)はあわてふためき、朱を恐れることから猪(豚)を恐れるようになった。中国では「猪」と「朱」は発音が同じだ。大豚の悪夢を見た順帝は、豚を飼わないようにと命じたがそれでも元王朝を救うことはできず、敵軍が城下に迫った時、城門をあけて北へ逃げたが、これを見て「猪」は「朱」なり、天の啓示だとこじつける者もいた。

明の武宗朱厚照は1491年に生まれたが干支の辛亥(カノトイ)にあたる。彼が豚の飼育を禁止したのは、猪年生まれの朱と同じ発音が二つ重なったからだ。正徳14年(1519年)に、豚の飼育・売買・殺害を禁止し、違反の罪は一族に及び、永遠に流罪に処すと詔を下したが、その後、清明節の祭祀に供える豚にも事欠くようになって止むをえずその禁令を廃棄した。

豚が百福を呼ぶ

豚が家畜の一番に挙げられるのは、飼い易くて時間と手間があまりかからない上に、効率が良いからである。豚は35%の餌を肉に転化できるが、羊は13%、牛はただの6.5%だけである。しかも豚は何でもよく食べお腹をこわさない。猪八戒が唐僧玄奘に従って仏教の経典を持ち帰ってからお釈迦様に「浄壇使者*」に封じられたのはこのためである。

* 仏壇の供物を浄める(平らげる)役をする側近

しかし人間は豚に牛、羊、兔のように草を食べてもらい、餌代を安くして、かつ肉質を向上させたいと思っている。これは多くの科学者が競って研究しているテーマで、イギリスの遺伝学者がすでに初歩的な成果を上げたらしい。最近、中国河南省淇県のある農婦が「草を食う豚」を育てた。

草類が主食であるが、その20%は玉蜀黍の粉と麦のふすまを混ぜている。こうして育てた豚は小柄だが、肉の質が極めてよく、広く注目を浴びている。

豚の出産率を高めるために、オーストラリアの研究者たちが、この12年来、ずっと人類と豚との関係を調査してきたところ、豚も軽く撫でられるのが好きだと分かった。豚は敏感な動物で、人間に乱暴に扱われるとストレスが生ずる。人類は豚にもっと慈愛と理解を示すべきだ、と一人の心理学者が語っている。豚を小さな小屋に詰め込むことで慢性の心理緊張を引き起こし、恐怖感をつのらせる。それに対してできるだけ積極的に体を撫で、やさしく叩いてやれば、豚のストレスを減らして雌豚の一回の出産頭数を増やすことができるのだ。

現在、ビクトリア動物科学研究所が、養豚研究委員会から「豚を軽く叩く」飼育プログラムを設計するよう委託を受けている。いよいよ豚は猪年に人類から待遇改善される見込みが出て来た。

古書『客退記談』に、「猪入門、百福臻(豚が門を入れて百福が来る)」とある。長い間、人間は豚が富と好運をもたらしてくれるようにと祈り、これが太った豚が門を押し入ってくる絵や、豚が宝箱を背負っている年画(正月に室内に貼る絵)、切り紙、刺繍などの民間美術となって代々伝わって来た。

いよいよ猪年だ、外から門を押し入っている豚を中に迎えよう、富と好運もついてくるのだ。

(本記事は北京で出版されている月刊総合雑誌「人民中国」より許可を得て転載したものです。)